

能登半島地震発生から半年 パルシステムは被災地に 寄り添い続けます。

石川県能登地方を震源とした能登半島地震が発生してから、7月1日で半年が経過します。パルシステムグループでは募金活動のほか、石川県を中心に、地元生協や支援団体と協力しながら職員を派遣し、人的活動にもあたってきました。配達車両への同乗、被災住宅からの不用品撤去、要介護者への避難所支援、共済支援など、支援活動にあたった人数はのべ44名。今回は現地に足を運んだ職員の声とともに、被災地や産直産地の状況をお伝えします。



(上) 被災した家屋の片付け作業のようす、(下) ボランティアにより運び込まれる災害ごみ

全国の生協と協働し 生活再建に向けた支援を続けています。

生活再建支援は、石川県生協連が能登町に設置した「コープ被災地支援センター」を拠点に活動。地元生協の「コープいしかわ」のほか全国の生協から職員が派遣され、3月11日から、希望する被災者からの要請を受けて家財の片付けやごみの搬出、生活支援物資の搬送などを実施しています。パルシステムグループでは5月11日までに、のべ11名が参加しました。

現地で支援活動に従事した職員より

- 期間:3月25日から5日間
- 活動内容:被災家屋の泥かき、清掃・仕分け、家財の荷下ろし、処理場への運搬など

「活動当時は震災発生から3カ月が経過していましたが、現地はまだ『片付け』の段階。奥能登地域までの道路が整備しきれておらず、かつ支援拠点を作れる場所がないことも、支援が滞っている一因だと感じました。まだまだ継続した支援、くらしに寄り添った『本当に必要な支援』をしていくことの必要性を痛感しました」

——パルシステム連合会ドライ食品課 大野彩華

復興に向けて歩みを すすめる水産業

石川県では、被害が少なかった金沢市の漁港や市場も活用しながら、徐々に漁業が再開されています。しかし、地盤隆起が深刻な輪島港を中心に、日本海に面した奥能登地域の漁港は、いまだ操業再開に課題が残っています。船が損壊するなど生業に欠かせない道具を失ってしまった漁業者も多く、港内の整備とともに、生活再建のためのサポートが不可欠です。

組合員から寄せられた募金の一部を 石川県漁業協同組合へ贈りました

「輪島は、水産業がおもな産業なので大きな打撃を受けています。漁港はひどい所で4メートル近く隆起し、一時はまったく機能しなくなりました。現在、港はおおむね整備されてきましたが、漁船の確保など課題は山積みで、とくに高齢の漁師が漁を再開するのは厳しい状況です。船を出したがっている漁師が多くいるなか、もどかしい思いです。パルシステムの組合員からは『石川の魚を食べて応援したい』との声がたくさん届いていると聞きました。漁師のみなさんも涙を流して喜んでくれると思います」

——石川県漁協組合長 笹原文光さん

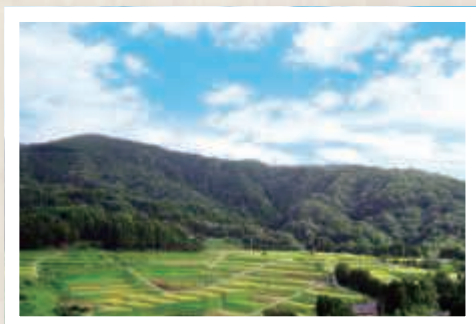


贈呈式のようす。(左から)全国漁業協同組合連合会代表理事会長 坂本雅信さん、石川県漁協組合長 笹原文光さん、パルシステム連合会専務理事 渋澤温之

今年の米作りを支えるために 68トンを食べきる。

『能登棚田米こしひかり』のお届けを再開します

「JAのと」は石川県北部の奥能登地域を管内とする、お米の産直産地。パルシステムとは2016年に産直提携を結び、自然環境に配慮して作った特別栽培米『能登棚田米こしひかり』を供給してきました。震災前の2023年産は、生産者53名で計82haもの棚田を手掛けていましたが、震災により一部の棚田が崩落。生産者やJA職員も被災し、米倉庫も設備が故障。2024年産の米作りも、保管されていた棚田米の行き先も、先行きは不透明でした。しかし震災から3カ月がたった4月中旬、故障していた米倉庫の設備が無事に復旧。保管されていた2023年産米のうち、無事だった約68トンがパルシステムに出荷されることになりました。今年の新米が収穫されるまでに、この倉庫を空にすることが急務です。今あるお米を食べきることは、苦難のなかでも前を向いて米作りに取り組んでいる産地の、直接的な支援になります。「こだわって作った棚田米を、パルシステムの組合員にぜひ食べてほしい」という産地の想い、そして復興への希望が込められたお米。約68トン=11,000袋を食べきって、産地の復興につなげましょう。



震災前の棚田のようす

先人たちが守り続けた棚田で、伝統的な農村文化により育まれた「特別栽培米」です

数量限定 11,000個
コトコト 640 きなり 308 きなりセレクト 343927
能登棚田米こしひかり

5kg 2,380円(税込2,570円)

JAのと(旧JAおおぞら)より。世界農業遺産「能登の里山里海」に育まれた米。もっちりした食感とほのかな甘みが特徴。



産地は棚田復活に意欲を燃やしています

「JAのと管内の奥能登地域は、道路もいまだ荒れたまま。生産者もJA職員も、自宅に帰れず避難所生活を続けている方がたくさんいます。そうしたなか、24名の生産者が今年も米作りをする意思表示をしています。面積は今年の半分以下、水路や田んぼの実態によっては1/3以下になってしまうかもしれませんが、気持ちは決して沈んでいません。御年85になる大ベテランの生産者も、元気に『今年も作るよ』と言ってきています。産地の意欲と想いに、ぜひとも“食べる”ことでこたえてほしいと思います」



——パルシステム連合会 産直事業本部長 島田朝彰

JAのとにも見舞金を贈呈しました

「JAのと組合長に、私たちは大変心配もしているが今年のお米も期待している、待っていると伝えたところ『それは何よりうれしい』と話されました。能登の里山での米作りは、日本の原風景の農村を守る取り組みでもあります。『能登棚田米こしひかり』を食べることで、被災された生産者の方々に応援している気持ちを伝え続けたいと思います」



JAのとへの見舞金贈呈式のようす。(左から)JAのと組合長 藤田繁信さん、パルシステム埼玉 樋口民子

——パルシステム埼玉 理事長 樋口民子

● 被災した産直産地や取引先にも見舞金を贈呈しました。 ●

『有機新潟こしひかり』の産地 「謙信の郷」(新潟県上越市)

金谷武志さん

「上越はこれまで何度か地震がありましたが、震災当日は過去に経験したことのない揺れ方で、床がひび割れ、家屋内にも物が散乱しました。家屋の壁や瓦が崩れてしまった生産者もいますが、人的被害がなかったことが幸いです。受け取った見舞金は住居や農業設備の再建、修復に活用します。今後もみなさんの期待にこたえられる米作りを継続することで、恩返ししていけるようがんばります」



パルシステム連合会本部での贈呈のようす(中央が金谷さん)

『からふとししゃもみりん干し』の作り手 「(有)中村海産」(富山県氷見市)

中村康紀さん

「機械などには大きな損壊はなかったものの、原料冷凍倉庫内が荷崩れを起こし、一時取り出せない状況でした。氷見市内は断水や液状化の被害はありましたが、幸い死者は出ていません。能登地方の被害が大きいと聞き、私自身も取引先などに協力を呼びかけ、物資提供などに奔走しました。商売を再開できる企業から率先して経済を回し、周りに恩返しをしていきたいと思えます」



中村さん(左)と、パルシステム連合会常務理事 辻正一(右)

『輪島うるし箸』の作り手 「(株)橋本箸店」(石川県輪島市)

橋本卓也さん

「工場の被害は比較的少なく、倒壊していたら廃業せざるを得ませんでした。従業員5人全員が無事だったのが何よりの幸いです。箸の原料となる能登産あすなろ材も被害はありませんでしたが、建物の修繕や被災証明書の発行申請に時間がかかっています。パルシステムの組合員のみなさんに箸を使ってもらえるよう、再開をめざします」



橋本さん(右)と、パルシステム連合会常務理事 辻正一(左)